白隠慧鶴と『宗鏡録』

柳　幹康

はじめに

本論文は白隠慧鶴（1686–1769）と『宗鏡録』の「悟後の修行」を比較し，白隠禅の特徴ならびに日本における『宗鏡録』受容について考察するものである．

白隠は日本臨済禅中興の祖と称される江戸時代の禅僧である．駿河国原宿に生まれ，11歳の時に寺で聞いた地獄の苦しみに恐怖したことが機縁となり，4年後に出家する．無字の公案に参究し，24歳にして大悟．増上慢に陥るも，飯山の正受老人（1642–1721）の鉗鎚を受けて更に公案に参じ，再び大悟してその境界を認められる．42歳の時，『法華経』「譬喩品」の閲覧中に蜚の鳴声を耳にし，大悟徹底．その後84歳で遷化するまで各地を巡錫して人々を接化したほか，多くの著作を執筆し，数多の禅画・墨蹟を残した[1]．その下よりすぐれた弟子が輩出し，今日の日本臨済・黄檗両宗の法系はみな白隠の門流により占められている．なお白隠はその生涯において大小数多くの悟りを得たが[2]，その門下で編纂された年譜には「師の得処，凡そ三時有り」として上述の三回の大悟を挙げ，うち最後の42歳の大悟徹底以前を「因行格」（修行により悟りに向かう段階），それ以後を「果行格」（得た悟りにより衆生を救う段階）に二分する[3]．

白隠に対する研究はこれまで，資料整理や伝記・思想の分析など各方面において分析が為されてきたが[4]，管見の限り『宗鏡録』との関係に焦点を絞ったものはない．これは白隠自身が『宗鏡録』を特に重視していないことに由るのだろう[5]．にも関わらず拙論が両者の関係に着目するのは，以下の二つの理由による．

第一に，『宗鏡録』が重視されぬこと自体，興味深い考察対象だと考えるからである．『宗鏡録』は中国の禅僧永明延寿（904–976）が禅の立場から従来の仏教思想を統合して編んだ書物であり，その後の中国のみならず朝鮮・日本にも大きな影響を与えた．うち中国・朝鮮では今日なお注目されているにもかかわらず，

日本では鎌倉・室町期に重視されたのみで，その後人々の記憶から薄れていく．なぜ日本においてのみ忘却されたのか，その状況を理解するうえで，今日の日本臨済・黄檗両宗の直接の淵源となる白隠禅の受容状況を見ることは重要である[6]．

第二に，両者の「悟後の修行」を比較分析することで，白隠禅の特徴を示すことができると考えるからである．白隠と『宗鏡録』はともに「悟後の修行」を思想の核心としており，その内容も類似する．ところが白隠は「伝灯・会元・広続灯，碧巌・虚堂・宗鏡録，及び一切の諸経論の中，何ぞ専ら悟後の修を示さざる」[7]，「伝灯・会元・広続灯，碧巌・虚堂・宗鏡録，且つ又（かつまた）の諸師の語録を見るに，終（つい）に此の大事（＝悟後の修）を記するを見ず」と記し[8]，『宗鏡録』など先行の文献には「悟後の修（行）」が記されていないと明言する．その理由を分析することにより，白隠独自の「悟後の修行」理解が明らかになるだろう．

以下，(1)白隠の実践体系と「悟後の修行」の位置づけを見たうえで，(2)『宗鏡録』の「悟後の修行」と比較し，(3)白隠独自の理解とその淵源を示す．

白隠の実践体系と「悟後の修行」

白隠には多数の著作があり，その内容も著作・年代により若干の相違・変遷が認められるが，その実践体系は「見性（けんしょう）」と「悟後の修行」の二点に集約される．その概略は以下の通り．

「見性」とは「自性本有の有様を，一回分明（ふんみょう）に見得」することであり（H12.34），自性とは「人人本具」のもの，すなわち皆に例外なく具わる「仏心」である（O4.247）．白隠によれば，参禅・念仏・看経・誦経など各種実践は「尽（コトゴト）是レ見道（＝見性）ノ輔助（ホジョ）」「助因」であり（H9.461; 12.180），「縦（タト）イ品（シ）ナ異（コト）ナレドモ，ソノ所証ニ到ツテハ」何ら「両般（ことなり）」は無い（H9.449）．ただし実践する際には，特定の修行に専心する必要がある．なんとなれば「両端ニ渉ツテ修行セン人ハ，魚モ得ズ熊ノ掌モ亦（また）得ズ」であり，虻蜂取らずの結果に終るからである（同488–489）．

各種法門のなかで白隠が重視するのが公案である．なぜなら公案は「疑団（ぎだん）起リ易ク」（同494），「参学ハ疑団ノ凝結ヲ以テ至要トス」るからである（同489）．見性に至るためには，この(1)疑団（深い疑い，大疑情）のほか，(2)自性（＝仏心）の存在と公案参究の重要性を信じる大信根（O2.412, H2.165），(3)「思イ立チタル事ヲ，遂ゲズヤ置クベキ」と憤起する大憤志が不可欠である（H9.211）．この三種を「三要」という[9]．

公案とは禅門において参究すべき問題であり，白隠によれば歴代祖師の古則のみならず，釈尊の一代説法もみな公案である（H7.114–115）．実際の接化の場において白隠が当初用いていたのは無字の公案であり，白隠はこれを「魔塁を砕くの宝輪」「情解を截るの利刀」「極めて霊験有り」と称する（K1.709; 2.849, O4.220）．のち60代の時に白隠は「従前の指南と抜群の相違ありて，誰に［々］も（格別に）疑団起り易く，工夫（励み）進み易き」独自の公案を創出する（N311, H12.45, K2.1142）．これが隻手の公案であり，「片手の声を聞く」ことと「その音声を止める」ことの二つからなることから，「両重の関」と称される．これが白隠禅の「初関」（最初の関門）であり，これを透過すれば「見性」が認められ，「龍杖払子」図が付与される．これは初関突破に対する証明・褒美であると同時に，次の「悟後の修行」に「勤め励ま」せるための激励なのでもあった（ZH7.217–218．花園大学国際禅学研究所編『白隠禅画墨蹟』二玄社，2009，解説121頁）．

「悟後の修行」は字の如く，悟り（＝見性）の後の修行の意で，自利と利他の両面から成る[10]．

自利とは「上求菩提」，すなわち完全な菩提を求めて更に修行に励み，数多くの公案に参究することである．白隠は言う，「夫仏祖の言教は，其の旨甚深にして，一回両回の透過を以て尽せりとすべからず．山に登るに，転登れば転高く，海に入るに弥入れば弥深きが如し．又世の鍛冶の鉄を鍛ひて刀を作るが如し．幾度も爐鞴に入れて錬り鍛ふて貴しとす．元これ同一爐鞴なれども，数度も入れて百錬せざれば，名剣とは成り難し．参学も亦然り．仏祖難透の大爐鞴に入て精錬刻苦の功積らざれば，一切智・自在智，現前すること能はず」（O6.329）．

利他とは「下化衆生」，すなわち衆生を教化・救済することである．白隠は言う，「下化は法施を第一と為す」（K2.1087），「若人法施を行ぜんと欲せば，先すべからく三経五論，普く内典外典に入り，伝記百家の書を捜索して，広く大法財を聚むべし．……法財無くんば，何を以てか法施を行ぜん」（H7.180）．白隠によればこの法施，すなわち「法宝を末代に弘通する」ことこそが「僧と称して彼の三宝の数に入る」所以であり（K2.1027），出家者は「尋常勤めて大法施を行じ，仏祖に代つて群生を済度」し，在家者は「時々出家を供養して，来生出離の勝縁を結ぶ」ことで，「出家と在家とは，車の両輪の互いに双び運るが如」く支え合うのだという（H3.131–132）．

以上，白隠の実践体系について略述した．その中核となる「見性」と「悟後の修行」中の「法施」（教法の施し）について白隠は「見性，教を抛つ，片輪轂．教，

見性を欠く，解語の鸚（おうむ）」（K1.274）と述べ，ともに不可欠だと明言する．周知の通り白隠は，達磨の語「若（も）し仏を覓（もと）めんと欲せば，須（すべから）是く見性すべし」（『血脈論』：Z110.809b）をしばしば引いて見性の重要性を強調するが（H2.148; 9.205; 12.293, K1.808, O4.131等），その一方で「法施するには見性が干要（かんよう）」と述べ，見性を法施のための手段に位置づけている（H13.34）．つまり白隠の実践体系において，「悟後の修行」，とりわけ利他の「法施」こそが，最も重要な核心なのである．

『宗鏡録』の「悟後の修行」

冒頭に記したように白隠は，『宗鏡録』など先行の仏典中に「悟後の修行」は見えないと言うが，実際には『宗鏡録』にも同様の概念が見える．いわく，「若（も）し先に修して而（しか）る後（の）ち悟らば，斯（こ）れ則ち有功の功にして，功は生滅に帰せん．若し先に悟りて而る後ち修さば，此（こ）れ乃ち無功の功にして，功虚（むな）しく棄てず」（巻15：T48.496b），「先に悟り後ち修さば，応（まさ）須に理と行と冥合すべし」（巻36：同625b）．

かかる「悟後の修行」について『宗鏡録』は，「頓悟漸修」と「頓悟頓修」という二種の境界を立てる．「頓悟漸修」は仏心を看取した上で，その後も残る煩悩の習気を除去する過渡的な段階であり，「頓悟頓修」は看取した仏心（＝慈悲の心）のままに，戒律から外れることなく，一切の善行を行う最高の段階である[11]．善行は六波羅蜜や誦経・念仏など多岐に渉るが，『宗鏡録』は「有情に法施し，乃至，内外に捜揚し，言に寄せて教化す」るために編纂されたものであり（『自行録』：Z111.165b），その構成も仏典の「要文」の蒐集・提示により各種機根を遍く救済するものとなっている[12]．これに鑑みればやはり，法施が重視されていたことは間違いない．つまり開悟の後に法施による衆生救済という実践を立てる点で，『宗鏡録』と白隠は一致しているのである．

更に言えば，このような考えは両者のみに限定されるものではなかった．たとえば室町期の禅僧夢窓疎石（むそうそせき）（1275–1351）も，「仏ノ内証ノ境界ニ契当」（開悟）した後は，「タヽ禅宗ノ手段ノミナラス，教門ノ施設乃至（ないし）孔孟老荘ノ教，外道世俗ノ論」の一切を学び法施することで，「衆生ヲ済度スヘシ」と説いている[13]．また5世紀初頭に鳩摩羅什が訳出し，後の東アジア仏教に多大な影響を及ぼした『大智度論』にも，「既に自（みずか）ら度を得て，復（ま）た当（まさ）に衆生を度（すく）脱うべし」「既に自ら仏と作（な）り，而して三乗を以て衆生を度（すく）脱う」とある（巻91：T25.704b,c）．

つまり「悟後の修行」として法施により衆生を救うという発想は，早くより大

乗仏教に内包されていたのである．

菩提心の判

ではなぜ白隠は先行の仏典に「悟後の修行」が見えないと言うのであろうか．その答えを示してくれるのが，次の一節である．

> 中に就いて貴ぶべきは悟後の修行なり．……菩提心を以て第一と為す．古え春日の大神君，笠木の解脱上人に告げ玉わく，「大凡倶盧孫仏より以来の智者高僧，菩提心無きは，皆な尽く魔道に堕す」と．……怪しいかな，古来仏教祖録の中，終に未だ菩提心の判を見ず．貴ぶべし春日大神君，纔かに二三行の神勅と雖も，其の善巧，諸経論にも超過したまわんか．（『壁生草』巻上：H3.194–197）

ここで白隠は，「悟後の修行」の核心が「菩提心」であり，その「菩提心の判」は「古来仏教祖録の中，終に未だ」見えぬと述べている．つまり白隠が先行の仏典に「悟後の修行」が見えないというのは，その核心を明かした「菩提心の判」が見えないということなのである．

「菩提心の判」とは「春日の大神君」が「解脱上人」に与えたという託宣――「智者高僧，菩提心無きは，皆な尽く魔道に堕す」――である．白隠はこれを「二十七歳の時，荒井竜谷の隠寮に在つて，窃かに砂石（＝『沙石集』）を読ん」だ際に眼にしたという[14]．おそらくこの「菩提心の判」は，幼少期に聞いた地獄の怖ろしさを白隠に思い出させたことであろう．最初の大悟を得た後に正受老人に参じ，彼に出家の動機を問われた24歳の白隠は，「我れ小少従り地獄の苦悩を恐る，是の故に出家す」と答え，「自領の漢」（自利のみで利他を欠く者）と罵られている[15]．そしてその3年後，「菩提心無きは，皆な尽く魔道に堕す」という春日神の託宣を眼にして白隠は，実に「大いに恐怖」し「覚へず寒毛卓」するにいたる．その後白隠は「久しく菩提心を疑」い続け，その末に得られたのが「四十二歳の時」の最後の大悟なのであった[16]．これにより白隠は，「菩提心」とは「法施利他の善業」であると悟り，それ以降「法施を行」じ続けたのだという[17]．思うに大悟徹底の際に白隠が読んでいたのが，仏が巧みな譬喩を用いて人々に法を施す『法華経』「譬喩品」であったということは，単なる偶然ではないだろう．

白隠は後年，次の道歌を詠んでいる，「悟りても下化行衆生の心なきは，魔道に堕つと春日野の勅」（H14.237）．たとえ悟りを開こうとも，法施利他の菩提心無き者はみな例外なく魔道に堕ちる――たしかにこのような警句は先行の仏典にお

いて一般には見えないものであり，この神勅を与えてくれた春日神の恩は白隠にとって，「遥かに仏祖に超過」するものなのであった（H8.156）.

むすび

悟りし後に衆生を救済するという考え自体は，『宗鏡録』など先行の仏典に広く見えるものであるが，悟りし者とて菩提心無くんば魔道に堕つと戒める「菩提心の判」は，白隠が仏典からではなく『沙石集』を経て春日神から得たものであり，この意味において「悟後の修行」は先行の仏典には見えぬものなのであった.

また白隠は特に『宗鏡録』を重視していない．これは白隠が重視する公案が成立する以前の書物であること，白隠が「悟後の修行」を『宗鏡録』からではなく春日神から得たこと，出版物が広まる江戸時代において白隠は『宗鏡録』のみならず各種文献を博捜して法施を行ったことなどに由るのだろう．その後白隠禅は日本臨済・黄檗両宗を席巻し，『宗鏡録』も殆ど注目されることのないまま今日に至ったのであった.

1）N481–687.　2）O3.244; 4.119, H3.233, 316; 4.150.　3）N568, 691.　4）執筆にあたり西義雄［1940］・柳田聖山［1967］・真流堅一［1972］・芳澤勝弘［2005］のほか，古田紹欽・荻須純道・陸川堆雲・常盤義伸・ルッジェリ アンナ・小濵聖子等諸氏の研究を参照したが，紙幅が限られているためその一々を記していない.　5）白隠は『荊叢毒藥』において，『宗鏡録』の編者延寿は「智鑑高明，識量寛宏なり，吾が輩，思議を其の間に容る可きに非ず」と述べながらも，その所説に疑義を呈している（巻4：K1.737）．また同書巻1では延寿に言及するも，それは『五家正宗賛』の概略の説明のために過ぎず，特に延寿を評価しているわけではない（同175）．なお白隠が『宗鏡録』など延寿の著作を用いた主な例として，目下次の3種を挙げることができる．⑴「為勇猛衆生成仏在一念，為懈怠衆生涅槃亙三祇」，もと『宗鏡録』（巻17：T48.504b）による『起信論』の取意（T32.581b）．白隠はこの語を好んで用いるが，それが『宗鏡録』に由来することは示さず，釈尊の語（H7.214–215; 8.162; 9.453; 10.72），『起信論』（H14.94），『沢水法語』（K2.881, N600）の句として引く．⑵「空華ノ万行ヲ展開（シ），谷響ノ度門ヲ建立」（H9.213），「大作夢中仏事，広度如化含識」（K1.158）．『宗鏡録』（巻23：T48.542c），『万善同帰集』（巻下：同993a），『観心玄枢』（Z114.869b–870a）の句．⑶「禅而兼浄土者，虎而挾翼者也」（O2.400, H12.84）．伝延寿撰「四料揀」の句（拙著［2015:339］）．このほか白隠が『大灯録』の出典を弟子に調査させた『槐安国語骨董稿』には，その典拠として『宗鏡録』を挙げるものの（O3.483, 519, 535．なお560に『万善同帰集』あり），提唱の際にそれを重視した形跡はない.　6）なお曹洞宗の開祖道元は『宗鏡録』を重視しない.　7）『勧発菩提心偈 附たり御垣守』（H8.151–152）．『宗鏡録』は今日「すぎょうろく」と読み慣わされているが，白隠は「シユキヤウロク」の読みを附記する．なお当該の句は疑問文であるが，拙論［2018a］［2018b］では反語と取違えていた．ここに訂正しお詫び申し上げる.

8）『宝鑑貽照』（K2.1070）．なおこれは白隠に学んだ修行僧の言葉として記されるものであるが，それを白隠は「所説，甚だ当たれり」と述べ，自身の理解に適合すると明言している（同1075）．　9）もと『高峰原妙禅師語録』の説（巻上：Z122.673a–b）．白隠は『壁生草』（巻下：H3.248），『八重葎』（巻3：H7.110），『寒山詩闡提記聞』（巻3：O4.283），『息耕録開筵普説』（O2.412）などに引く．　10）白隠は「悟後の修行」の階梯説明時に「四智」や「五位」「四弘誓願」等を用いる．真流堅一［1972］・芳澤勝弘［2005: 264］．11）拙著［2015］第3章．　12）拙著［2015］第1章．　13）川瀬一馬解説『夢窓国師 夢中問答，谷響集』（勉誠社，1977年），頁179，189．なおこの主張は，『宗鏡録』の「大悲心従後得智，後得智従根本智」（巻28，35：T48.580b，617c）を承ける可能性が高い．14）『勧発菩提心偈 附たり御垣守』（H8.154）．春日神の託宣の話は，『壁生草』（巻上：H3.197–201）・『宝鑑貽照』（K2.1104–1106）に詳しい．なお『壁生草』は『沙石集』閲覧を25歳の時と記す（H3.195）．また白隠が見たであろう貞享3年（1686）刊『沙石集』流布本に当該の話はそのままの形では見えない．おそらく白隠は巻1（6，12–15葉）や巻9（26–29葉）等関連の話を総合して理解したのだろう．　15）『東嶺和尚年譜』（O1.287）．16）『勧発菩提心偈 附たり御垣守』（H8.154–156）．　17）『壁生草』（巻上：H3.195–196）．芳澤勝弘［2005:11–12, 263］．

〈略号一覧〉
H：『白隠禅師法語全集』芳澤勝弘訳注，禅文化研究所，1999–2003.
K：『荊叢毒藥』芳澤勝弘訳注，禅文化研究所，2015.
N：『新編 白隠禅師年譜』芳澤勝弘訳注，禅文化研究所，2016.
O：『白隠和尚全集』後藤光村編纂代表，龍吟社，（1934–1935）1967.
T：『大正新脩大蔵経』大蔵出版，（1924–1934）1960–1979.
Z：『卍続蔵経』新文豊出版，1976.
（引用に際し，芳澤氏の訳注に準じて平仮名と片仮名を使い分けた．）

〈参考文献〉
西義雄1940「白隠禅師に依る日本の精神文化統一とその契機」『日本仏教の歴史と理念』明治書院，471–521.
真流堅一1972「白隠禅における人間形成の思想」『熊本大学教育学部紀要 第二分冊 人文科学』21: 83–104.
柳幹康2015『永明延寿と『宗鏡録』の研究――一心による中国仏教の再編――』法蔵館.
―――2018a「禅が伝える心の鏡 第11回――日本における『宗鏡録』の受容――」『花園』68（2）: 11–13.
―――2018b「愚中周及『稟明抄』と『宗鏡録』」『花園大学国際禅学研究所論叢』13: 1–20.
柳田聖山（1967『臨済の家風』）1987『禅の時代』筑摩書房.
芳澤勝弘（2005）2016『白隠――禅画の世界――』KADOKAWA.

（本研究はJSPS科研費（JP17H00904）の助成を受けたものである）

〈キーワード〉 白隠慧鶴，『宗鏡録』，悟後の修行，法施，春日神，菩提心，『沙石集』

（花園大学国際禅学研究所副所長・准教授，博士（文学））